

【現地報告】

伝統的ポリフォニー国際シンポジウム 参加報告

甲 地 利 恵

開催日 : 2010年10月4日(月)～10月8日(金)
開催場所 : グルジア トビリシ市 Tbilisi State Conservatoire (トビリシ国立音楽院)
主 催 : International Research Center For Traditional Polyphony of Tbilisi State Conservatory
(トビリシ国立音楽院 伝統的ポリフォニー国際研究センター)
後 援 : UNESCO、グルジア文化省、グルジア正教会

2010年10月、グルジアの首都トビリシ市で、トビリシ国立音楽院伝統的ポリフォニー国際研究センターが主催する「第5回伝統的ポリフォニー国際シンポジウム(The 5th International Symposium on Traditional Polyphony)」が開催された。報告者である甲地も発表のため参加した。シンポジウム参加はもとよりグルジアを訪問するのは初めてであったので、グルジアの印象の一端などもこの場を借りてお伝えしたいと思う。

1. シンポジウムの背景

このシンポジウムは、1980年代のソ連のグルジアで、新進気鋭の民族音楽学者らがグルジアの聖歌や民謡についての国際会議を開催した流れから始まっている(1984年・1986年・1988年、ソ連邦の解体に伴う混乱で10年のブランクの後1998年・2000年の計5回)。これらの国際会議の後、グルジアだけでなく世界のポリフォニーをテーマとする国際シンポジウムが構想され、2002年の第1回に結実した。以後、2年おきに開催され、今回の2010年開催で第5回を迎えている。

前回の開催は2008年9月だが、そのほんの1か月前、南オセチアをめぐるロシアとグルジアとの軍事衝突が起こっている。当然シンポジウムの開催も危ぶまれたが、軍事行動が収束に向かったと判断されるや、主催実行委員会では「グルジア人の平和の選択の象徴として(as a symbol of peaceful choice of Georgian people/前回の予稿集の編者巻頭言より)」シンポジウム開催を進める断固たる決意をした、という。複数の声が必要な点で人を人と繋いできた伝統的ポリフォニーの演奏と研究を、国を越えたシンポジウムとして続けていくことに平和への希求が切実に重ねられたのだろう。エントリー数30人15カ国のうち実際に参加できたのは半数に満たぬ14人11カ国だったそうだが、軍事衝突直後であることを考えれば11カ国とは驚くべき(勇気ある)参加率だったと言える。

それだけに、通常どおりに開催できたこの第5回は、主催者の側にも例年の参加者にも、ひとしおの安堵と感慨があるように見受けられた。折しも2010年は、トビリシ市近郊のムツヘタ市にあるスヴェティツホヴェリ教会の再建1000年記念にあたるとかで、このシンポジウムは教会に対し献納される、という位置づけになっていた。

ところで、本稿でも慣例にしたがって「グルジア」と書いているが、実はグルジア語ではグルジアのことをグルジアとは言わない。「サカルトヴェロ」(=カルトヴェリ人の国)というのがグルジア語での自称だそうだ。「グルジア」はロシア語Гуржияで、国の守護聖人とされる聖

ゲオルギウスGeorgiusに由来しているとのこと。英語では「ジョージアGeorgia」)。かといって「サカルトヴェロ」でよいかというと、多民族国家の内情を考えると一抹のためらいも覚える。というのは、現在の「カルトヴェリ人の国」内に古くから居住しているのは、カルトヴェリ人だけではなく、アブハズ人・オセッソ人・イスラム教徒のグルジア人・アルメニア人・ミングレリア人・アゼルバイジャン人・チェチェン人、ほか、じつに多様な民族や文化的背景の異なる人々が居住しているからだ。

そうした複雑な国内外の問題を抱える国にありながらも、このシンポジウムはひとえにグルジアの音楽研究者らの、自国のポリフォニーによる民謡に対する愛情、よりよい実践（伝承・発展）へ向けて研究しようという熱意に基づいて継続されてきたものであることが、会期中いたる場面で感じられた。自国のポリフォニー文化に誇りを持つからこそ、他国のポリフォニー文化についても知見を深め、演奏者同士・研究者同士のネットワークを構築し互いの音楽文化を高めていこうという理念が、先行する国際会議時代から連綿と受け継がれてきたのだろう。

2. 第5回シンポジウム概要

(1) 日程

前述のような背景のもと、「ポリフォニー」を共通のキーワードとして、グルジアの音楽をはじめとする各国の伝統的な音楽をテーマとする、研究発表・演奏会・記録映画の上映・その他から成る、多彩な内容が5日間の日程で展開した。研究発表と演奏会とを大きな2本の柱として進める構成は、前身である国際会議時代から受け継がれているスタイルである。

表1：シンポジウム日程

10月4日 (月)	11:30～15:00	小エクスカージョン（ムフラニ公宮殿跡、ワイナリー）
	17:00～	記者会見
	18:00～	開会記念演奏会（児童アンサンブルによる演奏）
	21:00～	グルジア総主教を訪問
	22:00～	レセプション
10月5日 (火)	9:30～17:00	研究発表
	13:00～15:00	演奏会
	19:00～	世界のポリフォニーコンサート
10月6日 (水)	9:30～17:00	研究発表
	13:00～15:00	演奏会
	18:30～	映画上映会（グルジア音楽を記録した映画3本）
10月7日 (木)	8:00～20:00	エクスカージョン（アナヌリ、ムツヘタ）
	13:00～15:00	演奏会
10月8日 (金)	10:00～17:00	研究発表
		ラウンドテーブル（グルジア音楽の記録映画の上映）
		最終セッション
	13:00～15:00	演奏会
19:00～	閉会記念演奏会	

(2) 演奏会

演奏会には、グルジア各地の民謡（合唱曲）のアンサンブルのほか、外国からのアンサンブルも参加した。外国のアンサンブルといっても、その半分近くは、グルジア出身者が外国で結成しているグルジア民謡のアンサンブルか、グルジア民謡に心酔し学んだ外国人によるアンサンブルである。グルジア以外の伝統音楽としては、リトアニア、オーストリア、フランスのコルシカ島から、それぞれの伝統的ポリフォニーのアンサンブルが参加した。

表 2：演奏会参加国・参加団体数

参加国	参加団体数
オーストラリア	2
オーストリア	1
カナダ	1
フランス（コルシカ島含む）	2
リトアニア	1
グルジア	19（うち児童アンサンブル 13）
イギリス（スコットランド含む）	3（うち児童アンサンブル 1）
アメリカ合衆国	1

(3) 研究発表

研究発表では、7つの発表枠とポスター発表の枠とで計 31 題の発表が行われた。

表 3：研究発表枠・発表数

発表枠	発表数
1 Asian Traditional Polyphony（アジアの伝統的ポリフォニー）	7
2 Regional Styles and Musical Language of Traditional Polyphony（伝統ポリフォニーの地域的様式と音楽語法）	7
3 Caucasian Polyphony（コーカサス地域のポリフォニー）	4
4 Polyphony in Sacred Music（宗教音楽におけるポリフォニー）	1
5 Historical Recordings of Traditional Music（伝統音楽の歴史的録音資料）	3
6 Traditional and Art Music（伝統音楽と芸術音楽）	1
7 Theory in Practice（実践理論）	1
ポスター発表（※壇上で各 10 分ずつの発表が行われた）	7
ポスター発表（※発表者は参加せず予稿のみの掲示）	(5)

発表数が多いので、ここで各発表の内容を一つ一つ報告することは割愛する。

なお、シンポジウムの予稿集は毎回出版されるが、主催の伝統的ポリフォニー国際センターのウェブサイト（<http://www.polyphony.ge/index.php> ※グルジア語版と英語版）では、毎回のシンポジウムのプログラムや参加者などの概要報告のほか、予稿集の出版後には掲載した各論文をPDFにしてサイトにアップしている。第 5 回の予稿もいずれ同様にPDFでアップされる予定なので、詳細はそちらを参照されたい。

3. 雑感など

さて、今回私が最も聴きたかったのは、リトアニア北東部に伝承される「スタルティネス」というジャンルの歌の演奏と、研究者にしてアンサンブル「トリス・ケトゥリオセ」の歌手でもあるD.ラチウナイテ-ヴィチニエネさんの発表「Some parallels between the Lithuanian and Ainu vocal polyphony (リトアニアとアイヌの、声のポリフォニーの対比)」だった。というのも、主催の実行委員の一人でありポリフォニー研究の第一人者であるJ.ジョルダーニアさんがその著書*の中で、輪唱を多用する伝統ポリフォニーの典型例として、アイヌのウコウッ（ウコウッ）とリトアニアのスタルティネスとを挙げていたからだ。

ラチウナイテ-ヴィチニエネさんは発表の中で次の7点を類似する要素として指摘された；
1) 輪唱形式および2度音程の存在 2) 歌詞について、意味が不明瞭なものが多いこと、オノマトペやリフレインの多用など 3) 鳥のさえずりを模した歌唱 4) 輪唱がエンドレスで、旋律の始まり＝終わりの構造 5) 歌と踊りの一体性 6) 儀礼的性格 7) 主に女性が歌う伝統。

また、リトアニアには5弦のツィター型弦鳴楽器があることについても言及された（必ずしも5弦ではないこと、開放弦のみの奏法、などはアイヌのトンコリでも同様である）。

浅学にして私はスタルティネスとはどういうものか全く聴いたことがなかったので、演奏会でのトリス・ケトゥリオセの演奏が、初めてのスタルティネス体験となった。何とも不思議で魅力的な音楽だった。白い伝統衣装を身に付け四人が中心を向いて立ち、よく響く地声で次々と輪唱し、メロディは際限なく繰り返される。たぶんこれをずっとやっていたらトランス感覚に入りそうだ。シンプルでゆったりとしたステップが儀式のように歩まれる。

確かに、ひとつのメロディを追いかけて延々と繰り返すという構造はアイヌのウコウッと異なるものではない（あのトランス感はウコウッのそれに似ている）。歌い手らが輪の中心を向いて歌う伝統や、歌詞に多出する動物のオノマトペ、儀礼的な性格なども、確かにアイヌ音楽との類似点として指摘できると感じられた。

しかし、決定的に異なる点もある。スタルティネスでは長2度か短2度の隣り合った音同士のおつかりが、これでもかというくらい多く聞こえてくる。これは、1曲のメロディの前半と後半とが隣り合った別々の調（に還元できる音）でできていること、前半と後半が同じ小節数・拍数で成り立っていること、一人が前半を歌い終わったところで次の人が入るといった、人数と入り方の決まりが厳密であること——などの結果、生じるべくして生じた2度音程と言える。アイヌ音楽では、もちろん2度音程のおつかりも現れるが、スタルティネスほど多くなく、必然的に生じるというほどでもない。双方の音楽に「特徴的」とされている要素を抽出していくと驚くほど共通点のある一方で、音楽の響き全体としては全く異質に聞こえるというのは、何とも面白く興味深かった（なおシンポジウム後まもなくの11月16日、スタルティネスはユネスコの世界無形文化遺産リストに登録された）。

伝統的な歌での2度音程はリトアニアに固有なものというわけではなく、今回生演奏を聴いたグルジアの音楽をはじめ、東欧の民俗音楽では頻出する音程である。ジョルダーニアさんの著書ではしばしば、諸ポリフォニーの考察に際し、2度や7度などのいわゆる不協和音の出現の頻度や性格に言及されている。確かに、2度や7度などの隣り合った音程の響きの方が、溶け合うような協和音程よりも「他者（の声）」が意識されやすいのかもしれない。西洋の芸術音楽の理論では「不協和音程」とされる2度だが、聴けば聴くほど何とも気持ちのよい唸りを伴う音程に聞こえ、スタルティネスにはかなり「ハマって」しまった。

シンポジウムのメインであるグルジアのポリフォニーは、どのアンサンブルも圧巻この上なかった。学生時代にグルジアの男声合唱のCDを聴いて以来、いつかこの凄い音響を生演奏で聴いてみたいと思っていたが、会期中はそこそこでこれが鳴り響くので、私には至福の時間であった。

グルジアのポリフォニーは男声のみまたは女声のみで合唱するのが伝統的で、基本的には3声部で、ドローン（通奏低音）と上声2部のメロディーパートとで構成されている。発声も、力強い地声をベースとしている。地方によって様式や特徴に違いがあるという。西のグーリア地方には独特の裏声「クリマンチュリ」を使う技法があるが、これと地声の重なりが何とも気持ちよく、これにもかなりハマってしまった。何度聴いても聴きあきない。

地声をベースとした合唱といえば一時期、東欧の「ブルガリアンヴォイス」が日本でも有名になったが、ほかのコーカサスの諸民族や東欧諸国でも、伸びやかで力強い声のポリフォニーの伝統を有している。日本の学校教育で私たちが訓練されてきた“合唱”などは、世界のポリフォニー文化の中ではほんの一部のスタイルに過ぎないということを、このシンポジウムでの諸演奏を通して、改めて実感した。

グルジア国内にはたくさんのこうした演奏をするアンサンブルがあり、研究成果と連携しながらそれぞれの演奏レパートリーを増やし、いい意味で競い合っている。聴衆も耳が肥えていて、今回のシンポジウムの演奏会にも研究者や専門家ではない一般市民が多数来場していた。

また、順序が前後するが、開会記念演奏会には各地の児童アンサンブルが多数出演し、それぞれのレパートリーを披露していた。児童アンサンブルといってもその演奏は、大人と比べても聴き劣りするものでなく、本当に素晴らしかった。自分の国や郷土の誇る伝統音楽を学び享受する機会が、ポピュラー音楽やクラシック音楽を楽しんだり学んだりするのと同じくらいふんだんに、小さいころから身の回りにあるという豊かな音楽的環境を、本当にうらやましく思った。日本のように、子どものころから伝統音楽を気軽に学べる機会も場所もほとんどなく、音楽の授業でも（指導要領があるのでしかたなく？）触れられる程度の音楽状況とは、選択肢の幅と奥行きが最初から全く違うのだ。

会期中のエクスカーションの一環で、郊外の山中にある「アナヌリ教会」を訪れた。開会式の翌日以来ずっと天気が悪くついていたが、この日は晴天に恵まれた。古い石造りの教会の裏手には、貯水湖にせり出した形で、広いテラスのような鐘楼が設けられている。

私はトリス・ケトゥリオーセー一行の後について、鐘楼の地下に通じる狭い階段を降りてみた。突き当りは真っ暗で、通路よりは天井が高くなり、円形の小部屋のような場所になっていた。と、彼女らは何やら軽く打ち合わせると突然歌いだした。石の壁に囲まれた薄暗く狭い空間に、歌声だけが反響する。「異空間を作り出す仕掛け」としての音楽の現場に立ち会っているような感覚だった。

そうするうちに一行は鐘楼に集まり、記念に歌を歌おうということになった。参加者は音楽学者か音楽家か、もしくはその両方である人たちばかりなので、何かあればすぐに歌い出す。男声アンサンブルのメンバーが口火を切った。伝統なのか、円陣を組むように中心を向いて歌いだす。それから参加各国のアンサンブルが次々に、それぞれのレパートリーを歌いだす。聴く側も、知っている歌なら唱和し、知らない歌でも簡単なドローン（通奏低音）のパートにすぐ入って歌う。

ふと見ると湖面が日差しに光り、鐘楼の向こうからは逆光で陽が射し、歌い手たちの背後に後光が射しているような錯覚がする。秋の冷たく乾いた空気の中に、倍音の豊富な心地よい声の重なりが響くことしばし。集っているのは各地各国の実にさまざまな異文化からの人々同士で、歴史的には敵対関係にあった国同士、民族同士もあるはずだ。私もドローンのパートに混じってハーモニーの中に入り込みながら、ここと同じ国の中でつい2年前には銃声が響いたのだ、という考えがふと浮かんだ。自分以外の人々と共に歌うことの意味、ポリフォニーという共通のキーワードで異文化の音楽を持つ人々同士が研究し演奏することの意味は、2年前のシンポジウムではもっともっと複雑で大きなものであったに違いないと思うと、この平和な音楽の時間に感謝せずにいられなかった。

シンポジウム最後のラウンドテーブルで、ジョルダーニアさんが、ポリフォニーの淵源をめぐってのコメントの中で「human desire to share music」という表現が使われた。「音楽を分かち合う人間的な欲求」——このフレーズは、アナヌリ教会の光景とともにとても心に残った。

トビリシ市街を散歩した時に思ったが、とにかく教会がとても多い。石を投げれば教会に当たると言っても大げさではないくらいだ。住宅街の中に近接する教会も多かったが、小高い場所のてっぺんとか崖になっている場所の先端といったような場所に、必ずといってよいほど古びた教会があるのが不思議だった。エクスカーションではバスでトビリシ市郊外に向ったが、車窓から見渡すかぎり目につく丘の先端に、やはり（まるで約束ごとのように）石造の建築物が建っている。

尋ねてみると、あれは教会であると同時に見張り台であり要塞でもあるということらしい。なだらかな丘陵の向こうからいつどんな敵が来るか分からないから、このような見張り台ないし要塞が必要だったのだろうか。事実グルジアは何度も他民族の支配を受けた歴史を有している。日本の城なども山や丘の上に築城しているのだから、この光景に衝撃を受ける私が鈍感だったといわれればそのとおりだ。グルジア教会内の静謐さや神秘的な雰囲気アイコン群と、戦争のための砦のイメージとは、とっさに結び付かなかったのだ。しかし、教会に入ってよくよ



アナヌリ教会：鐘楼の横で、代わる代わる歌を献納する一行。



トビリシ市内：山上のナリカラ要塞と聖ニコロズ教会（左上）



スヴェティツホヴェリ教会：広大な敷地を囲う石塀には、よく見ると銃眼が設けられている。



ジュヴァリ修道院：ムツヘタ市を一望できる山の頂上にある。



トビリシ市内：旧市街のカフェの前の看板。カラオケタイムは遅めに設定されているのか？



閉会記念演奏会：フィナーレで全員がステージで歌う。

く見れば、イコンの聖像の目や顔が消されたまま修復もされずにいたりする。宗教は、戦争の理由や征服の象徴にもなるのだということを物語っているようだ。

グルジアのポリフォニーの響きは、これまで私にはなだらかな丘陵地の光景を連想させてくれていた。それはどこまでも平穏なコーカサスのイメージでしかなかった。しかし、実際にかの国を訪れてみると、のどかな風景の中に連なる丘陵のその突端には、何世紀ものあいだそこで見張りが行われていた石造りの教会兼要塞が建っている。もちろん今はさすがに番兵は立っていないが、グルジアの複雑な民族構成、南オセチア問題、内戦、ロシアとの関係悪化など、楽観できない要素がまだまだたくさん残っている。小高い場所の古い石造建築は、地続きで「異国」があるということ、「国境」に区切られて暮らすということ、のリアルさのように私には思えた。

グルジアのポリフォニーが（そしてあらゆるポリフォニーが）、銃声に遮られることなく響き続け、「平和の選択の象徴としての」このシンポジウムが、今回と同様に平和な状況の中で次回以降も開催され、いっそう多くの国の人々を繋ぎ続けていくことを願って、この拙い報告を終える。

註

**Jordania, Joseph 2006 “Who asked the first question ?” Ivane Javakishvili Tbilisi State University: Tbilisi, Georgia (英語。なお、<http://www.polyphony.ge/index.php>から、PDFで閲覧することができる)

追記

3月11日の大震災の後、シンポジウムを通じて知りあった各国（リトアニア、セルビア、グルジア）の研究者たちから電子メールをいただいている。「日本のために祈っている」「あなたたちのことをずっと思っている」「日本人は辛抱強いことを私たちは知っている」「勇敢でいてください」など、日本での未曾有の震災（とそれに続く原発事故）の犠牲者・被災者に対する、悲しみの共感と温かい励ましの気持が寄せられたことを、ここに併せて報告しておきたい。合掌

(こうち・りえ／北海道立アイヌ民族文化研究センター)

